

令和5年度 横浜市立市ヶ尾中ブロック

第4回 学校運営協議会 報告書

・日時 令和6年3月4日(月) 10:00~12:00

・会場 市ヶ尾中学校 学校図書館

司会 市ヶ尾中学校 戸田 緑(副校長)

記録 市ヶ尾中学校 門澤 佑輔(専任)

【出席者】

溝上慎一(桐蔭横浜大学教授) 竹下恭子(市ヶ尾中校長) 矢崎純一(荏田西小校長)
霜田恵子(東市ヶ尾小校長) 柏村茂(前市ヶ尾連合自治会長)
鳥屋尾彰(荏田西連合自治会長) 蕪木泉(市ヶ尾連合自治会長 兼下市ヶ尾町内会長)
西川和彦(中市ヶ尾自治会会長) 関根秀昭((株)ユーディット代表取締役)
大久保智弘(ビジョナリー キャリア アカデミー 代表)
高力由美子(学校・地域コーディネーター) 笠原順子(学校・地域コーディネーター)
木村祐典(市ヶ尾中 PTA 会長) 秋吉順子(荏田西小協力の会代表)
根本智子(東市ヶ尾小 PTA 会長) 鈴木裕也(東市ヶ尾小児童専任)
戸田緑(市ヶ尾中副校長) 門澤佑輔(市ヶ尾中生徒指導専任)

【欠席者】

菅野 由美子(学校・地域コーディネーター)

【次 第】

1 開会の挨拶

市ヶ尾中学校 竹下 恭子 校長

今年度、全4回の学校運営協議会を実施し、様々な形で先に進めたような1年間となったように思います。一つの取り組みとして、市ヶ尾中ブロックの荏田西小、東市ヶ尾小、市ヶ尾中の児童・生徒、教職員、学校運営協議会委員の方で一からアンケートの作成を行い、様々な方々の協力を得てアンケートを実施することができました。今年度のまとめとして、アンケートの結果を基に、振り返りと次年度の取組に繋がるような話し合いをどうぞよろしくお願い申し上げます。

2 委員長挨拶

桐蔭横浜大学教授 溝上 慎一 委員長

今年度、委員長になって2年となりますが、その頃からあった「あいさつ」や「小中合同あいさつ運動」について、様々な方の協力によって、また新しい次の取組に向かって行くことができるような実感があります。今年度のまとめを通して、次年度どのように繋げていくかがとても大切になると思います。皆様の議論を踏まえて、来年度も発展させていきたいと思っております。



3 協議「あいさつについての意識アンケート」の結果を受けて

①アンケート結果の報告

児童・生徒 1,544人 保護者 715人 地域 113人 総合計 2,372人

◇多くの方の協力を得て、今回のアンケートの1つの目的としてある、保護者・地域の方のあいさつについての意識や考えについて、アンケートを通して知ることができた。

【学校のまとめ】

・荏田西小、東市ヶ尾小、市ヶ尾中の結果を見ると、「おうちの人や友達に、おはようのあいさつをする。」という項目については、「自分からあいさつをする」「言われたらあいさつをする」を合わせると95%近い回答状況であり、習慣としてのあいさつが身につけていることを感じる。

・また、「小学校・中学校を卒業してからもあいさつを続けようと思いますか。」「あなたはあいさつを大切なことだと思いますか。」「笑顔であいさつされると、いい気持ちになる。」の項目については、「とてもそう思う」「すこしそう思う」を合わせると95%の回答状況であり、あいさつについての関心やあいさつをすることへの意識はとても高いと言える。

・一方で、「あなたは進んであいさつをしている方だと思いますか。」の項目については、「とてもそう思う」35%程度、「すこしそう思う」45%程度であり、あいさつはしているものの、自分から進んであいさつをしているかと問われると、積極的にしているとは回答できないという様子が見られる。

◇自由記述（小学生・中学生抜粋）

・「あいさつを増やすために、自分から気持ちのいいあいさつ（目を合わせて・大きな声で・笑顔でなど）をどんどんしていったらいいと思います。」

・「まず、自分からあいさつをすることが大切だと思います。そして、あいさつの大切さをみんなに伝えていくことが大切だと思います。」

・「あいさつを増やすために私たちには、まず自分が、「どんな人にでも」「自分から」あいさつをしていくことが大切だと思います。例えば登校班などで、班長さん、副班長さんなどの高学年が、校長先生、地域の人などに自分からあいさつをした時に、123年生などの自分より下の学年が「あいさつをしたらこんな気持ちになるんだ。」「自分もやってみようかな。」のような気持ちになってくれたら嬉しいです。」

・「地域の人たちとの交流をたくさん増やして、親しい関係をもつことで挨拶が増えていくと思います。」

・「みんながあいさつをし合うことで、あいさつをすることに抵抗（恥ずかしさ）がある人やあいさつの習慣がない人でもあいさつをしやすくなると思いました。そのためにまずは一番身近な家族の人または友達にあいさつする習慣をつけていき、あいさつをすることに慣れていくべきだと思います。ただ理あいさつを勧めるよりも、あいさつで得られるメリットも交えて勧めたほうがあいさつをする理由ができて良いのではないかと考えました。」

・「自分は部活の方針としてあいさつを大切にしているそのおかげで習慣づけることができたので、部活など小さな集団で積極的に取り組むと増えるのではないかと考えた。」

【地域・保護者のまとめ】

- ・地域、保護者ともにアンケートの結果は概ね一致している。
- ・「家族の方へおはようのあいさつをする。」「地域の人・近所の人へおはよう等のあいさつをする。」については「自分からあいさつをする」「言われたらあいさつをする」を合わせるとほぼ100%近い回答状況であり、また「あいさつを行うことは大切なことと思いませんか。」についても「とてもそう思う」「すこしそう思う」を合わせるとほぼ100%近い回答状況である。地域、家庭でも習慣としてのあいさつが定着しているのはもちろん、あいさつについての関心やあいさつをすることへの意識はとても高いと言える。
- ・一方で、「地域の子どもたちは、現在あいさつができていますか。」については地域・保護者ともに「とてもそう思う」6%、「少しそう思う」46%「あまり思わない」40%といった結果であり、地域・保護者の方のおよそ半分近くは、子どもたちが積極的にあいさつをしている印象が薄いと感じている。
- ・またそれは、「地域の子どもたちにあいさつをしっかりとできる子どもになって欲しい。」の質問について、98%近くの方が「とてもそう思う」「すこしそう思う」と回答していることから、地域・保護者の方はあいさつの大切さを感じているとともに、現状は少し物足りなさを感じながらも、あいさつができる大人に成長して欲しいと考えていると思われる。

◇自由記述（保護者・地域抜粋）

- ・「知らない人に声を掛けられたら…の対処もあるけど せめて地域内の方々から声をかけ家庭でもあいさつの大切さを教えてこそ この輪が大きくなるはずです。」
- ・「あいさつは、生活する上で大人も子どももとても大切なことだと思います。それぞれの性格や学年の成長過程によって、あいさつをしない時期もあるのも分かりますが、家庭内や社会生活を営むにあたり必要なことだと思います。地域であいさつ運動に取り組むにあたり、頭の中のどこかにあいさつの大切さが残って、これからの日々過ごす中で気付きのひとつになればと考えます。」
- ・「地域全体であいさつを推進していることが分かるような標語のようなものを目に見える形で目に見える場所に掲げてみんなの意識を高める。あいさつは、知り合い同士だけのものではない、という意識が大事。知らない相手にも気軽に使えるものなのだという意識を育てられたらと思います。」
- ・「知らない人にあいさつをするのは必ずしも良いことではない。親が地区の人に関わり、子供にも地区の人に親近感を持つようにするのが望ましい。」
- ・「あいさつを交わすことは大事だと思いますが、顔見知りでないお子さんに声掛けすることには不審者からの声掛けと同区別するのか等を考え、やや躊躇いがあります。」
- ・「見ず知らずの人にあいさつをするのは抵抗がある。知らない人とは話をしない。近所の人かどうかもわからない。解決策は顔見知りなること。手段の一つとして地域行事への積極的な参加、子供と子供はともかく、子供と大人、大人と大人は必要と思います。」
- ・「あいさつはもちろんした方がよいが、防犯面から考えると顔見知りならよいが、知らない方に声を掛けるのは子どもたちには難しいのかも。（学校の中だけならOK だが）」

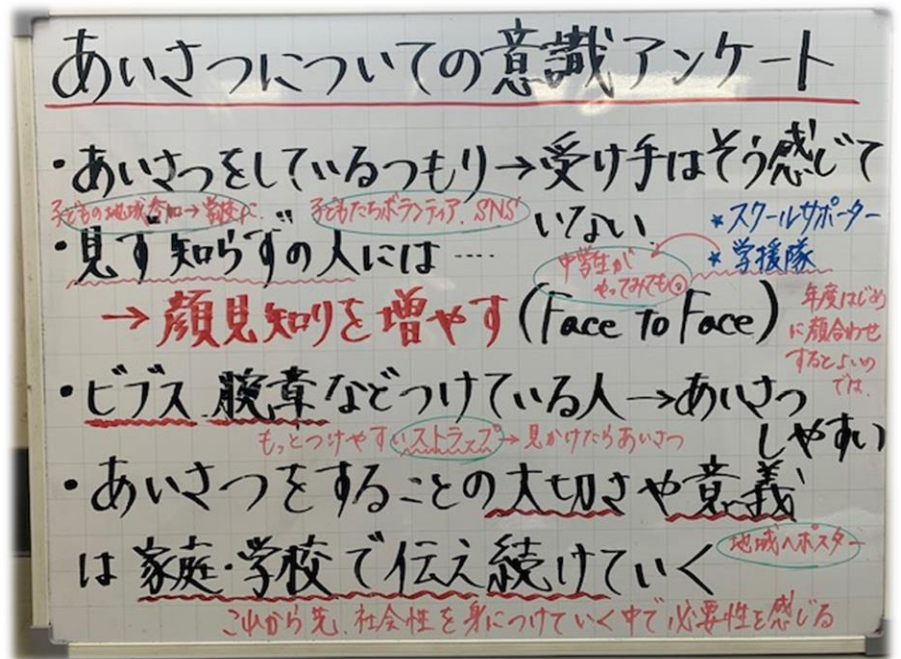
②小グループ協議

- ・結果をもとにしたグループ協議（課題、分析、次年度への取組等）

③全体共有

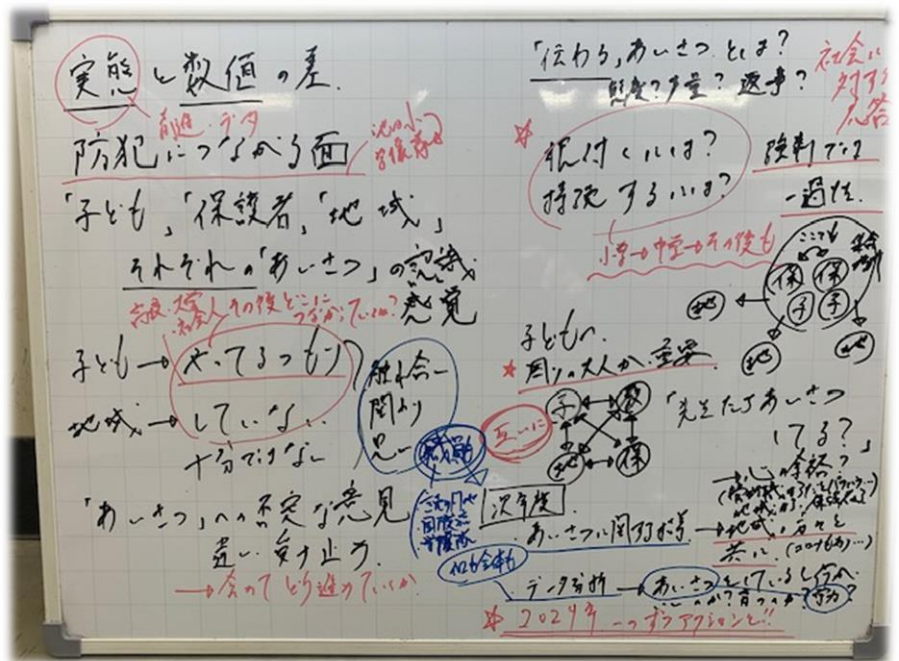
Aグループより

- ・アンケートの結果を受けて、「あいさつをしている。」→「受け手はそう感じていない。」ように感じた。
- ・校内や家庭、近所など顔の見える関係の中ではあいさつが行われているが、地域ですれ違う人など関係性が分からない人など、見ず知らずの人にあいさつをすることは難しいと感じている。
- ・次年度に向けてできることとして、4月に学援隊・ボランティアの方と児童の顔を合わせる機会を設けたり、校内に学援隊の方の写真を張ったりなどをして、児童を見守る地域の方として顔を知ってもらうような発信があると、地域で会った時もあいさつがしやすくなるのではないかと思う。
- ・あいさつをすることの大切さや意義については、これから先も家庭・学校で伝え続けていかなければならない。これから先、成長して社会に出たときにどこかであいさつの必要性に子どもたち自身が感じる時が来る。その時に向けて、あいさつの種を子どもたちに関わる大人が蒔き続けていかなければならないと思う。
- ・中学生が学援隊へ参加するなど、大人側の立場になってあいさつを試みる。
- ・子どもたちが地域の行事やボランティアに参加する機会を増やし、顔を繋いでいく。
- ・「ウエル・タウン～横浜コミュニティサイト～」のようなボランティアサイトのチラシなどを、学校からのメール配信で子どもや家族に広げて地域と関わる機会を増やしていく。
- ・この人たちは自分たちを見守ってくれている方たちだとわかるようなもの（ストラップ・ステッカー）などを広げてFace to Faceの関係づくりをしたい。
- ・あいさつについての働きかけをポスターにして地域の回覧板や掲示板に掲示していきたい。



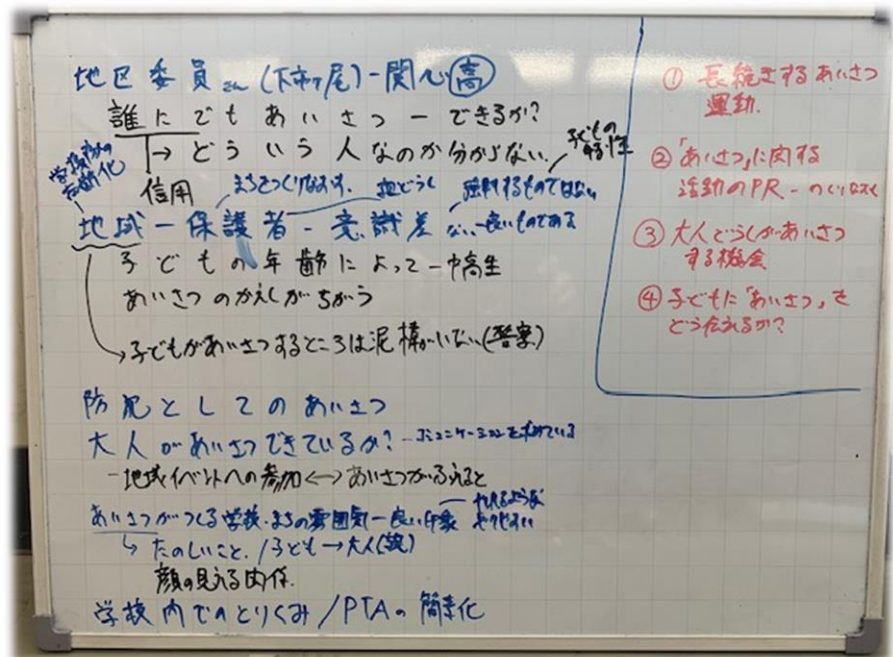
Bグループより

- ・実態と数値の差や、ズレあるという気付きはすごく大きかった。
- ・子どもたちはあいさつをしているつもりでも、保護者の方や地域の方はあまり十分ではないと感じているというズレを知ることができたのは大きかった。
- ・あいさつについて、少数ではあるが否定的な意見もあり、そういった方々も含めて違いや受け止めをした上でどうしていくのかを考えていくことが大切だと思う。
- ・伝わるあいさつとはどんなものか考えてもよいと感じる。あいさつをしていて、小さい声でも返している子はある。伝わるあいさつとは、声量なのか、態度なのか。
- ・強制的なあいさつは一過性なもの。根付かせるには、心からあいさつをする姿勢を育てたりすることが大事。
- ・小学校、中学校を卒業した先の、高校生、大学生になってもあいさつを必要と感じる。
- ・集団登校の集合で保護者の方々同士があいさつをするという姿も大切。そこから子どもたちが保護者の方へあいさつ、保護者の方が地域の方へあいさつ、子どもたちが地域の方へあいさつするような、自然な広がり根付いていくとよい。また、学校の先生たちもあいさつを積極的にしていく。子どもがあいさつをするかではなく、保護者同士、先生同士など周りの大人がどうしているのか、子どもを囲む環境が非常に大切である。
- ・次年度に向けて、コロナ以前行っていた学援隊の方の紹介など、ふれ合いや関わりなどの機会を増やしていきたい。校内でも地域の読み聞かせボランティアをしてくれる方や学援隊の方の写真を掲示して、子どもたちが見守りをしてくれている地域の方の顔を知る機会を作っていく。
- ・また、今回のアンケート結果を個別に見て分析し、学力の向上やコミュニケーション能力の向上、個々の伸長や成長など「あいさつをすることでこんなよいことがある。」というようなことを示していけるとよい。
- ・また次年度もできるアクションを増やしていきたい。



Cグループより

- ・アンケートの結果を見て、全体的にあいさつについての関心は高いであろうと感じる。
- ・ただし、だれにでもあいさつできるわけではない。地域の中でのあいさつは、顔の見える関係でなければ難しいと思う。
- ・地域と保護者であいさつについての意識に大きな差はないが、あいさつは強制するものではない。よいものではあるが、うちの子はできない。など見受けられた。
- ・子どもの年齢によって、低学年、中学年、高学年、また中学生となるとあいさつについての意識は変わる。
- ・一つの事例として、朝の登校であいさつが返ってこない児童や生徒でも、毎朝の登校の中で学援隊の方などからあいさつをされることは基本的には嬉しいと感じている。(嫌だと感じていれば、登校のルートを変えるなどする。) あいさつを貰うことによって、何か元気を貰っているなど、登校の中の一つのルーティーンとしている。もし、学援隊のあいさつがなく、その子が登校していたら、いつもより少し元気が貰えていないかもしれない。あいさつ返ってこないからといって、子どもがあいさつをすることやあいさつをされることを嫌がっている訳ではない。
- ・防犯の側面、コミュニケーションの入り口としての側面があるが、一方で大人がそれをしてきているのか。あいさつがある町やあいさつが溢れる学校とは、印象が良い。誰にでもあいさつをすることを励行する訳ではないが、あいさつを意識している町は雰囲気は良くなるのではないかなと思う。
- ・長続きするあいさつ運動や、あいさつに関する活動のPR機会などを検討したい。
- ・子どもにあいさつをどう教えていくのか。コミュニケーションの入り口でもあるし、防犯にもなる。また、あいさつを返されると大人もうれしい。そういった取り組みが増えてくるとよい。



4 第2ワーキンググループ（広報担当）から報告

- ・学校運営協議会のHPを作成するという案もあったが、HPを作成するとまたそのPRが必要になる。学校運営協議会は合議体なので、学校・PTA・地域、既にそれぞれが持っている広報の媒体を使って、学校運営協議会の発信をしていくのがよいのではないかと。
- ・今回のアンケートを実施して、子どもと大人であいさつについての認識にずれはあったが、同時にあいさつについての関心が高いこともわかった。
- ・市ケ尾中ブロックではこれからもあいさつを推進していきたい。これは強制するものではないが、街の雰囲気をよくする、防犯の意識を高めるということで、今後ともご協力をお願いしたい。
- ・また、次年度に向けて、学校・PTA・地域がどのような広報の媒体をもっていて、いつ発信しているのかをリサーチして、情報をどこに載せるか、どこまで広報活動をリーチできるかなどについて分析していきたい。

5 R6年度に向けて 次年度の計画について

- ・今年度の取組を受けて、次年度の1回目に具体的なアクションを話せるとよい。
- ・新年度第1回目の日程については、企画会を挟んで5月以降にお知らせ。

6 その他（連絡事項等）

7 閉会の挨拶

東市ケ尾中学校 霜田 恵子 校長

今年度、市ケ尾中ブロックの学校運営協議会に参加したが、こんなに活発に議論がされ、自分の思いや新しいアクションのアイデアが溢れる学校運営協議会に感動しています。アンケートの作成から、調査、分析まで、年度内に様々なアクションができたのは、皆様の熱い思いと地域のバックアップ、職員の取組のおかげであると感じます。

また、学校としてもやらなければいけないことが見えてきて、あいさつについては改めて顔の見える関係の大切さを感じるとともに、顔の見える関係を広げていくことで、あいさつを広げていくきっかけとなることを感じました。また次年度もこの地域の良さを、学校の教育活動にも強く反映させていきたいと感じます。来年度以降もどうぞよろしく願いいたします。